

武者小路實篤選集

第五卷

武者小路実篤選集 第五卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 5 卷

昭和39年 6 月12日 初版発行

定価 六八〇円

著 者 武者小路実篤

発行者 真鍋謙二

本文製版 株式会社 欧文社

本文印刷 斉藤印刷所

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 河上製本工場

東京都新宿区納戸町五番地

発行所 図書出版 株式 青銅社

電話 二六〇局 八七七一番

序

自分は書きたい事、書ける事を書いて来た。自分は現実に生きられなかった事を小説や脚本に書いた。しかしそれは現実に経験出来なかった事にしろ、心の内では現実以上に純経験した事実と言っているかも知れない。僕は人間の心をつくったものに忠実になりたいと思っている。人間にこう言う生活をさせたがっているものがある。しかし現実は人間にその生活する事を不可能にしている、人間は本来の生命を如実に生かしたがっているが、現実はそれをなかなか許してくれない。しかし僕は現実に負けずに、人間の本心を生かしたく思っただけで今日まで来た。現実に負けた場合、負けた事実をごまかそうとは思わないが、負けたまま引きさがらうとは思わない。僕を書くものは真心のままに生きたい人間の真情だ。僕が新しき村を生まないではいられなかったのも、その真情を現実的に生かさないではやまない意志からだ。これが人間の意志だと思っただけ。どう生きたら本当の人間は満足して生きられるのか、またあきらめら

れるのか、僕は一個の人間として生きぬきたく思っている。そして僕は一個の人間として、この世に書き残したいものを書いて来たと思っている。どこまでかけたかは知らないが、書きたいと本気に思った事を書いて来たのは事実だと思っている。

昭和三十九年五月二十八日

武者小路実篤

武者小路実篤選集・第五卷

目次

幸福な家族 7

暁 259

ある彫刻家 373

虹 401

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

幸福な家族

「お父さん、この頃お兄さん少し変よ」

佐田正之助の娘綾子は父にそう言った。

「あいつは昔からへんだよ」

正之助は下手な——家族は皆口ではそう言っている——油画をかきながら、気のりがなさそうに言った。

「お兄さん、へんでもかまわないのね」

「それはへんによつては氣にならないこともないが、しかしあいつは馬鹿じゃない。あいつのすることはあいつに任せているのだ。少しぐらいへんなことがあったってほったらかしておく方がいい。しかしお母さんが心配しているというのなら別だが」

「お母さんにご存知ないの」

「お母さんにお饒舌りのお前が言えないことか」

「それは言えないことよ」

「そうか。それなら事少し重大だな」

「それはそうよ」

「お前はあわてものだから」

「だって私、お友達から聞いたのよ」

「何を聞いたのだ」

「お兄さんが、女の方と歩いているのを見たって」

「あはははは、それはお前と歩いているのを見たのだろう」

「馬鹿ね、お父さんは、私のお友達が見たのよ。私だったらすぐわかるわ。それにお友達はひどいことを言うのよ」

「お前の友達は皆お前に似て口が悪いのだろう」

「お友達も初め後ろからみて、お兄さんに気がついたのでわきにいる女の人を私かと思ったので、声かけようかと思ったのですって、だがどうも私より姿がいいようなので、少しへんだと思って前へ出て顔を見たら、雲泥の差があつておどろいたと言うの、そしてあとでふき出して、ごめんなさい、つい本当のことを言つてというの。なお悪いわね」

「お前の方が雲だと思つていればいいさ」

「私をほめるのはお父さんだけよ」

「お前が自信がなくなると可哀そうだからさ」

「まあひどい。だがそれほどでもないわね。まあ十人並より悪くはないでしょう。悪くたつて私ちつともかわないけど」

「仕方がないさ、しかしお前も時によつて美しくなるよ。悲観することはない」

「ちっとも悲観なんかしていないわ」

「それは感心だ」

父はリングをかきつづけている。

「お父さんはよく画ばかりかいてあきないのね」

「他に用がないからさ」

「お母さんが困っていらっしやるわ。着物をよごしたり、座蒲団をよごしたりして」

「正蔵の話はどうなったのだ」

「それだけよ。だがその女の方どんな方か知りたいのよ」

「それは俺も知りたいな」

「お父さんにお心当たりない？」

「ないね。お前の方が知っていそうなものじゃないか」

「ところが少しも知らなかったの。ただこの頃一緒に映画を見にゆかないときそつても、いつもうまく断わられて、つれてって下さったことが一度もないので、少しおかしいと思っていたのよ」

「そうか。それなら正蔵のことだからまちがいはないと思うが、俺も注意するから、お前も注意しておくれ」

「ええ、注意して、わかったら報告するわ」

「お母さんには当分内証がいいね」

「もう少し本当のことがわかるまでは、黙っているわ」

「わるい奴じゃなければいいが」

「大丈夫だと思うわ。品のいい人だったとお友達は言っていました」

「お前と雲泥のちがいが、本当にあるのかね」

「それが本当だと嬉しいのでしよう」

「まあそんなところかも知れない」

「まあひどい。だが私もそうなのよ」

父は娘が可愛くなった。もう二十になった娘を父は改めて見た。無邪気で、少しもしやれていない。しかし善良な顔をしている。美人とはいえなくても、決して悪い顔とは思わない。それ以上、何だか賢い子のように思われる。矢張り自分の子ほどこいいものはないと思う。

だが、冗談にしろこの子より雲泥の差があるという女、正之助には何か正蔵の運命がかえって明るいものと思えなかった。

二

正之助は正蔵の室に行ってみた。矢張り留守だった。彼は室を見廻したが、別に変わった点も見られなかった。机の抽斗ひだしをあけたい気もしたが、さすがにそれは気がひけた。何か神聖なものを害するような気がした。愛読書を調べてみたが別に変わったことはなかった。もし変わった点があれば、本がふえていない点である。むしろ変わらなすぎるところが変わっていたくらいだ。

しかし彼はなおよく注意して見ると、額の中の画が変わっていた。前にはミケルアンゼロの「天帝がアダムをつくった」画の写真が入っていたのを記憶していたが、今度はそこに余り有名なドイツの画家がかいた田舎

娘の面のそれも随分粗末な、外国の雑誌から切りとったらしい複製が入っていた。あまり美しい女の顔ではなかったが、どこか健康そうな愛くるしいふくらした顔をしていた。

彼はそこに何か謎らしいものを見た。その謎はすぐとけるが、しかしその内容が福か凶か一番大事なことが彼にはわからなかった。

彼はそれから妻のところに行った。そこには綾子がいて、何かしきりとおしゃべりしながら、菓子を食べていた。

正之助が入るとすぐ、

「お菓子をたべに来たの」

とそう言った。

「またそんなものの言い方をする」

「だってお父さんの顔を見ては可笑しくって丁寧な言葉なんかつかえないわ」

「くせになるからね」

「大丈夫よ。お父さんまた着物に絵具がついていてよ」

「そんなこと黙っているものだ。早く揮発油をもって来てふいておけ」

「つい余計なことを言っただけで損してしまった」

それでも綾子は元気に急いで揮発油をとりに行った。

妻の敏子は、正之助にお茶をついだ。

「正蔵はどこへ行った」

「銀座にゆくと行って出てゆきました」

「この頃は小遣いをほしがるかい」

「ちよくちよくほしがりますが、別に今までとはちがわないようです」

「本はあまり買わないようだね」

「そうおっしゃれば、本を買うから金をくれとはあまり言わなくなったようです」

そこへ綾子が揮発油をもって来て、父の着物を邪険にふいた。

「お父さんが、これで画をかかないと随分いいお父さんだとどなたかおっしゃったわ」

「私じゃないよ」

「私でもないわ」

「それなら正蔵だろう。さもないと俺が言ったことになるからね」

「きっとお父さんよ」

三人は笑った。

三

正之助はドイツ語の先生をしていた。そして二三翻訳物を出したことがあるが、学校が面白くないというのでやめてから、好きな画ばかりかいている。別に発表するわけでもないが、自分では内々大いに自信をもっているらしいが、家族から馬鹿にされている。ただ正蔵だけが、この頃少し変説して来て、時々親父の画を陰でほめている。しかしそういう時、必ず母か妹に、